ブランク　一話

──二十年前──

空に穴が空き、悪魔達が現れる絵。

モノローグ「突如、空に穴が開き沢山の悪魔が現れた」

黒いドーム状のコロニーの絵。

モノローグ「悪魔達は、人間から土地を奪いコロニーを形成」

コロニー内の様子。中では、奴隷として悪魔に仕える絵。

モノローグ「人間達を奴隷として支配していた」

世界地図。大陸の殆どが赤く染まっている。

モノローグ「人類の生存圏内が五割を切ったとき、奇跡が起こった」

空から本が落ちてくる。傷つき絶望した人々が本に触れる。

モノローグ「空から不思議な力が宿った本〈グリもワール〉が降ってきた」

悪魔とグリモワールを使って戦う人々のイラスト。

モノローグ「〈グリモワール〉を手にした人間達は、悪魔達に反撃を開始」

グリモワールを手にした者達のイラスト

モノローグ「そして現在。グリモワールに選ばれ、悪魔を倒す存在を人々はバトラーと良い、英雄視している」

主人公、ハジメの姿。

モノローグ「しかし、人々は知らない。真の英雄は、未だ目覚めていないことに──」

♢♢♢

　朝の空。高そうな、タワーマンションのリビング。

食卓でハジメの父と母、ニノとレイナが朝食を取っている。皆、自分の近くにグリモワールを置いてある。家族団らんの楽しそうな絵。しかし席にハジメの席はない。

扉が開く。

ハ「おはよう」

制服を着たハジメ登場。表情は暗い。誰も、ハジメに挨拶を返さない。ハジメ、キッチンに生き自分の朝食を作ろうとする。

しかし冷蔵庫には朝食を作れそうな食材はない。

母「そうそう、二人とも帰りに買い物をして来てくれない？」

ニ「えぇ。アタシ今日、討伐任務なんだけど～～。姉さん言ってきてぇ」

レ「はぁ、仕方無いわね。母さん、私が行くよ」

母「本当～～ありがとう。じゃぁ後で買い物のメモを送るから四人分買ってきてね」

母、チラリとハジメを見て意地悪そうな笑みで言う。

レ「分ってるよぉ」

あはははは、笑い声を聞える。

ハジメは、その笑みを背中で聞きながらギュッと拳を握る。

父「二人とも、そろそろ時間だぞ」

父、新聞を読みながら言う。

レ「本当だ」

ニ「ハーイ」

二人は食器をキッチンに持っていく。

ニノはわざと、水を飲もうと蛇口を捻ったハジメにぶつかる。

ハジメは倒れる。ハジメの顔面をニノはわざと踏みながら食器を片づける。

二人はリビングを出て行く。「行ってきまーす」という声が聞える。

ハジメはむくり立ち上がり自分の部屋に戻る。部屋は狭い。汚い布団。床には、ボロボロの教科書が乱雑に置かれている。

ハジメはボロボロの鞄を持ち部屋を出る。

♢♢♢

ハジメの顔色は悪い。腹の虫がなり、隣のコンビニを見る。自分の財布を覗く。財布には、小銭が少ししか入っていない。

ハ(はぁー。もうお金がない。給料日まで食パン半分だな)

ハジメはビルの液晶画面に目をやる。

ニュースキャスターの声「速報です。当然、街中に悪魔が現れました」

テレビの映像がニュースから戦闘シーンに変わる。悪魔が手を掲げると魔方陣が現れる。悪魔は魔力弾で攻撃。ニノは、緑のグリもワールを開き風の壁を作り魔力弾から自身と民衆を守る。

ニュースキャスターの声「悪魔のランクは騎士」

レイナが空高く跳ぶ。銀色のグリモワールを開く。本の中から刀が現れる。レイナは刀で悪魔を真っ二つにする。

ニュースキャスターの声しかし、たまたま登校中の出水姉妹がすぐさま撃退。死傷者はゼロです」

絵はニュース映像に変わる。

ニュースコメンターの声「いやー流石、出水姉妹。Ｓランクバトラーの称号に恥じない活躍ですね～」

ハジメは違うビルの液晶画面に目を向ける。

そこには、クリア・ライトが悪魔を倒す画像が映し出されている。

ニュースキャスター「世界最強のバトラーの呼び声もあるクリア・ライト氏が単騎で第三十コロニーを撃破。奴隷となっていた人達を介抱しました」

ハジメ(この世は残酷だ。例え、血が繋がっていたとしても、同じような生活をしていても格差が産まれる)

両親がニノとレイナがグリもワールに喜ぶ絵。

ハジメ(悪魔を倒す力グリモワールを手に入れて、英雄になれる奴らがいる)

ニノとレイナが凜々しく戦う姿。

ハジメ(一方で、何も手に入れられない者もいる)

両親に失望される絵。家族から冷遇され、痛めつけられ、無視される、ハジメの絵。

ハジメ(努力すらさせて貰えない人がいる)

ハ「クソッ」

ハジメは。フラフラと学校に向かう。

その途中、公園で泣いている少女を発見してしまう。ハジメは一度、立ち去ろうとするが引き返す。近くの自販機と財布を見る。

(※この少女は、後のマモンが化けた姿です)

女の子にジュースを差し出す。

ハ「どうぞ？」

ハジメ、不器用な笑みを作る。

少女「えっ？」

ハ「その……これを上げるから、泣き止んで欲しいな？」

少女、おずおずとジュースを受け取る。

少女「えっと……ありがとう」

ハ「どういたしまして。君は……どうして泣いているか……教えてくれるかな？」

少女「初めて、こっちにきて……道に迷ったの。ねぇ、お兄さん。この近くで人がいっぱいいる場所知らない？」

ハ「人がいっぱいいる場所？　学校とか病院のことかな？」

少女「学校や病院……ねぇ、その場所はどこにあるの？」

ハ「えっ！　……病院はアッチをずっと言った所。学校は、こっちに言って、二つ目の信号を右に曲がったところだよ」

ハジメ、指を指して道を教える。

少女「へぇ。そうなんだ。」

少女ニヤリと笑う。

少女「ありがとう。お兄さん」

少女、そう言ってハジメの前から消える。

学校についたハジメにガラの悪い同級生奈良坂、富岳、志村が現れる。。

モブＡ「よぉ。待ったぜハジメちゃーん」

♢♢♢

場所は学校の裏。富岳はグリモワールを使い、大量の水をハジメの体にぶつける。ハジメは水の勢いで壁に強く叩きつけられる。

奈良坂「おいおい、何へばってるのぉ～。ほら、立てよ！」

奈良坂、ハジメの襟首を掴み無理矢理立ち上がらせる。奈良坂、片手で具リもワールを開く。奈良坂の右腕にガントレットが装着される。

技名『・』

奈良坂「おら食らえ！」

奈良坂は右腕で、ハジメの顔面を殴る。次に、腹を殴る。ハジメは、吐血する。

ハ(クッソ。やっぱり世界は残酷だ)

ハジメ、地面に倒れる。

ハ(なんで、こんな奴らがグリモワールなんてもってるんだよ)

三人は倒れるハジメを笑いながら踏む。

ハ(クソ！　クソ！　クソ！　クソ！)

志村「そうだ！　コイツの顔を焼いて、誰も近づかない顔にしようぜ！」

富岳「そりゃー良いなぁ。コイツの顔、あの出水姉妹と似てて腹が立つしなぁ」

志村「じゃぁ、決定ってことで。おい、奈良坂コイツ押さえとけよ」

奈良坂「了解」

ハジメは無理矢理、奈良坂に立たされる。後から押さえられる。

志村「じっとしとけよぉ。じゃねーと、顔だけじゃなくて全身を焼くことになるからよぉ」

志村は赤いグリもワールを開く。

技名『・』

師村の手に赤い手袋が装着される。手に炎を宿す。師村、ジリジリとハジメに近づく。

ハ「お、おい。まさか、本気かよ。そんなの……死んじまう」

富岳「安心しろ。もし、全身焼かれても俺が消火してやるからよぉ」

師村「ということで、安心して燃えろよ」

突如、校庭に一筋の光が落下。轟音が響く。

志村「あ？　なんだ？」

富岳「おい、行ってみようぜ」

三人はハジメを投げ捨て、校庭に向かう。ハジメも気になりヨロヨロと校庭に向かう。

全校生徒が校舎から身を乗り出す。校庭の中央に視線を向ける。

落下の衝撃で生じた土煙が晴れる。そして、マモンの姿が現れる。

マ「皆様！　こんにちは！　私は魔界の七大姫の一人！　マモンです！」

マモン元気良く言う。

ハジメ、マモンを見て腰を抜かす。絶望の表情を作る。

ハ(最悪だ！　七大姫といったら一人で一国を滅ぼせる悪魔のリーダーじゃないか！)

ハ(そんな、そんな、存在がどうして！)

マ「さっそくで悪いんだけど、みんなにはアタシの奴隷になって貰いまぁす」

突然、悪魔が現れたことにより生徒達は混乱。学校を抜けだそうとする。

マモンは指を鳴らす。学校を包み混む結界が張られ生徒達を逃げられようにする。

マ「さて、じゃ。そういうことだから一人ずつワタシに傅いてもらおうかな」

富岳「おいおい！　寝言は寝て言えよ！　悪魔！」

マ「あれ？　アタシ、何か可笑しなこといったかな？」

ハ(馬鹿かコイツら！　相手は姫だぞ！　Ｓランクのバトラーが何人もいないと勝て無い存在なんだぞ！)

富岳「いいか悪魔！　ここには、何人もバトラーがいるんだ！　てめぇなんて！　一瞬で終わりだ！　そうだろう皆！」

校舎から「そうだそうだ！」「やってやるぞー」のような声が聞える。

校舎の窓からバトラーの生徒が飛び降りる。

富岳「皆！　やっちまえ！」

バトラーの生徒達は、一斉にマモンを攻撃する。

マモン邪悪な笑みを作る。

技名『・』

マモンを中心に、円形のバリアのような物が広がっていく。

マモンとバトラーの攻撃が直撃し、爆発が起きる。

煙が晴れる。

ハジメは驚愕する。何故なら、多くのバトラーの体が宝石やお金に変わっていたからだ。

恐るべき現実に志村は腰を抜かし尻餅をつく。顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている。

マ「あれー。まだ、生きてる人がいる。もう少し、範囲を広げるべきだったかー」

マモンはゆっくりと志村に近づき手を伸ばす。

ハジメ(逃げないと！　今、マモンは僕に気づいて無い。今なら、逃げられる！　志村なんて、どうだって良いじゃないか！　あんなクズ！　見捨てたって良い。見捨てたって──)

ハジメの脳裏に今まで、見限られ、見捨てられた記憶がフラッシュバックする。

ハ(クソ！！！─)

拳を握り、奥歯を噛みしめ、決意する表情。

マモンに小石がぶつかる。マモンと志村がハジメの方を向く。

ハ「おい！　マモン！　ぼ、僕があ、相手だ！」

ハジメ、目に涙を浮べ足を震わせながらファイティングポーズを取る。

志村「あぁ！　テメェ！　何言って」

ハ「うるさい！　良いからさっさと逃げろ！」

志村、ハジメの気概に圧倒されその場を逃げる。

マ「あっ、ちょっと！　もう！　せっかくの奴隷が逃げちゃったじゃん。グリモワールを持った人間は貴重……ってあれ？　お兄さんじゃん。あはは、魔力が無くて気づかなかった」

ハ「なんだよ、その態度。僕は、お前なんて」

マ「あぁそっか。この姿じゃ分らないか」

マモン、クルリとその場で回る。姿が、先ほど助けた少女の姿に変わる。

ハ「！」

マ「いやぁ助かったよ。ワタシ、この世界良く知らないからさぁ。お兄さんが人間がいっぱいいるところ教えて助かったよ」

ハ(僕のせいだったのか！)

マモン、元の姿に戻る。

マ「あーぁ残念だなー。本当は、お兄さんは奴隷にしても特別扱いしてあげようと思ったのにさ。こうやって、刃向かったら殺さないといけないじゃん」

マモン、魔力の衝撃波でハジメを吹っ飛ばす。ハジメは、強く地面に叩きつけられる。

マモンはハジメに近づく。ハジメに馬乗りにして首を絞める。

マ「だから、せめて人間の姿のまま殺してあげる」

ハジメは苦しさに藻掻くが、徐々に抵抗する力が消えて行く。

ハ「どう……どうして……」

マ「？」

ハ「どうして、こんなに簡単に人を傷つけられるんだよ……」

ハ「殴られたら痛いんだ！　蹴られたら痛いんだ！　そんな事皆、知ってるのに！　なのにどうして！　お前ら強い奴らは！　そうやって人を傷つけられる！」

ハジメの気迫に押され、マモンの手が緩む。

突如「ブランク」がハジメとマモンの近くに現れる。

マ「嘘……なんで。どうして、その本から、アイツの……ソロモンの魔力を感じるの……」

ブランクから純白の光と衝撃派が発生。マモンだけを吹っ飛ばす。

ブランクはハジメに近づき、ハジメの手に収まる。

ハ「これは……グリモワール」

マ「ちょっと、お兄さん……悪いけどそれ、渡してくれる……ううん、違うな。よこせ、人間！」

マモンは一直線にハジメに近づいてくる。

ハジメは「ブランク」のページをめくる。しかし、ページは全て白紙で愕然する。

ハ(なんだよ！　コレ！　こんなんじゃ、戦えないじゃないか)

マモンの手がブランクに触れる直前。

ハ「くそ！　期待をさせるだけさせて！　結局！　マモンに殺されろっていうのかよぉ！」

ブランクが光る。

マ「ちょっと！　何コレ！」

マモンの体が粒状に変化しブランクに吸い込まれる。同時にブランクの一ページに文字が浮かび上がる。

ハジメは突然のことに呆然しているとマモンの結界が破られる。

ク「おやー、可笑しいな。悪魔の反応が消えた……いや？　変わった？」

ハジメは声のする方を向く。そこには。クリア・ライト、ニノ、レイナを始めとする大量のバトラーが現れる。

ク「うん間違い無い。君、悪魔だよね」

クリア・ライトはハジメを指さす。